
Children * Fortune

彼岸花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Children*Fortune

【コード】

N0999Z

【作者名】

彼岸花

【あらすじ】

主人公が活躍して、活躍して、活躍する話ですw

主人公は基本無口ですw

A c t 1 : 立谷学院(前書き)

自分のだいすきな要素を詰め込んだ作品です。

行き当たりばったりな感じで書いていくと思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

A c t 1 : 立谷学院

ネパール下
子供だけの国

それは、実際に存在することは有り得ない。

理由は簡単。子供の知識だけで政治を動かし、国を収めることは普通に考えて無理だ。

しかし現在、ネパール下
子供だけの国ならぬネパルンティ
の街に成りつつある街が一つ存在する。

たつなみまち
『立浪町』

町といつても小さくはなく、面積約40,000平方km。人口は約23,000人。そのうち20,000人以上が18歳以下の子供たちだ。正に“子供の街”である。

人口の約9割が未成年の青少年少女達で、その全員が学生だ。残る1割はその学生たちに様々なことを教える教師たちであり、ここでは、サブイハルな普通では有り得ない戦闘技術を教えている。

どんな環境にあつても生き残ることができる技術や相手を1撃で戦闘不能にさせる技。

つまり、戦闘を想定した軍事訓練である。

そういつた学校は大抵、幼稚園から小等部までは軍で習う基礎を主に学び、中等部・高等部ではそれぞれの実力や系統にあつたものを学んでいく。

ここ『立谷学院』もその中の一つだ。

立谷学院は立浪町の中でも5本指に入るほどの、超お嬢様・お坊ちゃん校で入院するのも名家の子弟たちが多い。その為か、学力はそこそこ。

名家の子弟が多いというのも、学力維持の為、成績優秀者として平民（今では差別用語として死語）が毎年数十名入ってくる。ということも学院がやっているの、学院の学力低下は全く見られない。もちろん、戦闘の実技においても。

今は授業と授業の間にある自由時間。

ここは、勉強嫌いな貴族の子供達がめつたに來ない図書館。そこに一人の少年がいた。

髪の色は灰色がかった白銀のショート。

目は、澄み渡った紅色。

白い肌は、キメ細かく透き通っており、人形のような美しさがある。

彼が人形ではないと判断できるのは、時々パチパチと瞬きをさせたり、欠伸をしているため。

全く動かなかつたら、人形と見間違われても仕方がないと思えるほどの美しさが彼にはあった。

彼ゆうなき、はいが夕凧灰華は、貴族の子供ではない。

ということは、必然的に成績優秀者のうちの一人ということになるが、成績優秀者は学業面だけでは通らない。戦闘面においても優秀でなければならぬが、彼の見た目からはそんなことはまったく感じさせないほどひ弱だった。

彼がなぜ図書館にいるかということ、貴族たちの自分を蔑む無数の目が嫌だった訳ではない。

ただ入院したばかりなので、この学院の歴史・校則・案内図を確認しておきたかっただけだ。

自分に相応しい学院なのか。

ここに進学することを決めたのは父であり、自分で決めたわけではない。

第一この町では、幼稚舎から高等部までエスカレーターでいくのが普通でハイガの様に途中編入はめつたにない。

なのにここに来た。その理由がわからないため、ハイガは自由時間を利用して調べていたのだ。

「ハイガ!!」

自分に向けられた声に中断された。

後ろを振り返ってみると、入院式の時はじめに声をかけてきた少年が立っていた。

すえなが・るい
末永瑠依

漆黒の髪は軍人の様に短く切りそろえられている。

目は綺麗な金色。

ハイガとは対照的で、ついでに言えば女の子みたいな名前とは正反対の好戦的な雰囲気が漂っている。

「次の授業始まるぞつ!!」

どうやら、図書館に行って帰って来ないハイガを呼びに来たのだろうその声にハイガは

「ん。」

と一言。

その答えとは裏腹に、ハイガはまったく動こうとしない。

ルイはその姿を見て

「先行つとくからなつ!!」

こいつを待ってたら自分まで遅れるとばかりに、言い残し廊下を走り去っていった。

その姿を見送り、ハイガも席を立つ。

ここからがハイガにとって楽しい学園生活の始まりだった。

A c t 1 : 立谷学院 (後書き)

戦闘要素はまだ入っていませんw
銀髪紅眼のハイガ君 (自分の好みw)。これから大活躍していくと
思います。
友達?のルイ君にも期待です!!

Act 2：魔学研（前書き）

魔法要素が入ってきます。

どうやら作者の力不足で、あらずじで書いていた主人公がほぼ無口ということがあまり出来そうにありません。多少しゃべることもあるかもしれませんが、ご了承ください。

この話はフィクションです。実在する人物・団体・地名とは全く関係ありません。

A c t 2 : 魔学研

ここには、魔法というものが存在する。

“ここ”とは、世界を意味するわけではない。主に立浪町を示している。

立浪町には、魔法の開発・改良を主に仕事とする魔法科学研究所（略して魔学研）の建物がたくさん存在しており、日々新しい魔法技術の開発に専念している。

実際に現在、家庭に普及している魔法の数々はここで生まれた。

現在、魔法には構築式があり、それを創作・工夫し、様々な魔法を作ることができる。

が、それは誰でもできるような簡単な代物ではない。

魔法を作るには、複雑な構築式を理解する頭脳、元の構築式を分解できる魔力量、再構築するだけの想像力・創作力、そして頭脳。

それらが全て非凡な者たちが魔学研で魔法を開発している。

その魔学研のなかで一番大きな研究所に普通では有り得ない人物がいた。

魔学研には、普通30代以上のおじさんたちが多い。この町の成年未成年の比率を考えると有り得ないほどに子供はいない。理由は、分解する魔力量はともかく、子供の頭脳では、構築式を理解することができないからだ。

しかし、町の中心にある、大きな研究所の一番広く清潔に保たれた研究室に、一人の少年がいた。見た目は15、6歳。髪は灰色がかつた白銀のショート。目は澄み渡った紅色で、何気なく羽織っている白衣が知的な雰囲気^{かも}を醸し出している。

彼の目は高速で画面移動する文字を追っていた。

ほかの非凡な研究員たちが読めない速さで、それだけでも彼、ハイガは化け物だった。

「夕凧君。」

背後からしつとりした声が掛けられた。

読むのに集中していて気づかなかったハイガは、少し驚きながら

(デジャヴ??)

と、相手に少し失礼(?)なことを思った。

声を掛けてきたのは同じ研究員の楠乃木美宵くすのぎ・みよいハイガと同じで、研究所に居るには少し疑問を感じる、というより抵抗感のある格好だった。

白衣はハイガと同じ膝上のものを羽織っており、その下は、公務員が着ているような薄桃色のスーツだった。それはいいのだが、何より困るのが目のやりどころ。スーツはどうやらサイズが少し小さいらしい上に、わざとらしく胸の谷間が見えている。タイトスカートもギリギリの長さで、誘ってんのか?と勘違いされるほど無防備だった。

無論ハイガは何も感じないが。

そんな彼女は、研究所でただ一人の女性で(見た目も良く、性格も良い。・・・格好には突っ込まないことにする)狙っている奴も多いのだが、どうやら彼氏は居ないらしい。

ハイガには関係の無いことだが。

彼女がここ(みんなに嫌われている&妬まれているハイガの研究室)に来たのは、所長の呼び出しがあったかららしい。

「それにしても凄いわね。」

「何がですか？」

突然の賞賛に疑問を抱き聞き返す。

「今回の魔法開発に夕凧君が選ばれたことよ。」

「それが？」

「今回の開発は、今までの常識を覆す物らしいじゃない！！」

その開発チームに選ばれたのは、とつても凄くてとつても名誉なことなのよ？

もっと嬉しそうにしてもいいじゃない。」

どんなことにも無表情を崩さないハイガに先輩らしくアドバイス(?)をするミヨイ。

「そうですか？」

楠乃木さんも選ばれたと聞いたのですが？」

「そうだけど・・・。」

最年少で選ばれたのは夕凧君だよ？」

正に前代未聞のことだった。高校生になったばかりの少年が、ここに入ることもだけでも十分に彼の優秀さを物語っていた。

その上、重要な開発に関わるとなると、それこそ100年いや1000年に一人の逸材だともてはやされてもおかしくないほどの天才だった。

なのにこの少年はそれを誇ることも無く、黙々と作業を続けている。

「楠乃木さんも僕の歳とあまり差はないと思えますが。」

淡々と答える辺りがこの少年らしい。

「そんなことないわよ。」

さあ、所長が呼んでるわ。

早く行きましょう。」

年齢のことを軽く誤魔化し、ハイガの研究室から出て行った。

精密機器に背中を預け、自分を妬んでいるであろう先輩のその背中を静かに見送りながら、ハイガは笑う。

今まで誰も見たことのない笑を

腹黒い笑を

。

A c t 2 : 魔学研 (後書き)

学園ものになりませんでした&最初がすごい説明ばかりですみませ
ん(汗)

ハイガ君のスペックが一つ出てきました!

あとフェロモン爆発なお姉さん登場です!(ハイガは全く興味あり
ませんがw)

魔学研の方ももっと出していきたいと思います。

最強ハイガ君。次の話まで持ち越しです(泣)

A c t 3 : 合同授業(前書き)

学園の様子が書けるように努力します(笑)
ハイガ君の能力も出せるように頑張ります!!

A c t 3 : 合 同 授 業

立谷学院は軍事主義の学院である。授業にも戦闘を想定した実技が多々含まれる。

しかし現在、というより数十年前から、実際に戦闘を行なったという記録はない。つまり、建前だけの軍事校ということになる。が、いつ戦争が始まるかはわからない。

しかしその不安を抱えてでも立谷学院に通うのは、その後の人生において有利になるから、らしい。

前書していたとおり、ここはとんでもないお嬢様・お坊ちゃん校で、ここに通ったということは、資産家であるということの証だと貴族の間で考えられていた。

その為、貴族の戦うことのできない自己中な子供もこの学院に通っている。

しかし、どんなに金持ちの子弟でも授業を受け、決められた成果を出さなければならぬ。

無論そのために、合格基準は低く設定してあるが……。

その時間は、どれだけ魔法の発動を早くできるか、だ（まだ、実力と系統を測るため、合同授業）。

発動までの時間が短ければ短いほど、実力があると言える。その上、発動までに時間がかからないため、接近戦（白兵戦）で役に立つので重宝される（時間がかかると、ほかの人の援護が必要になるため速攻には向いていない）。

その（貴族）中で注目を浴びている一人の少年がいた。

あさひな・かおん
朝比奈訛音。

大富豪、朝比奈家長男の正に成金といった態度に成績優秀者たちは

引いていた。

どん引きだった。

「カオン君凄いや!!」

「8 / 0秒って!!」

「超天才じゃん!!」

カオンの取り巻きたちが、褒め称えるのに対してカオンは

「そんなことないよ。」

僕よりすごい人なんて沢山いるし。」

謙遜を表すその一言は、カオンが言うと嫌味にしか聞こえない。

「カオン君つてば謙虚さ」

「そうでもないって」

微笑みながら、そんな話をさつきから繰り返している。

その会話を断ち切ったのはハイガだった。

今回の授業は、基本的な魔法の雷鼓いかずち(一般的にはサンダー)をいかに早く発動できるかというもので、合格基準は20 / 0秒。カオンは合格基準を半分切った(低く設定された基準ではあったが)。そして照準も正確。正に言うことなしだったが

ハイガはそれを上回る2 / 0秒という速さで雷鼓を発動させた。

照準も正確で

威力も一撃必殺できそうなほどに。

ハイガの放った雷鼓は目標に当たった瞬間

『ズガアアアアアアアアアアアアアアア』

とその場にいる人全員の肺腑を決る轟音と共に、目を焼く閃光が迸ほとばしった。

それだけで、みんなが立ち尽くした。

成績優秀者として入院した人達も、貴族の子弟達程ではないが指一本動かすことができなかった。
当の本人は、何事もなかったようにボオーっと突っ立っている。

指導していた教員もあいた口が塞がらず、地面に穿たれた穴をジッと見ていた。
数秒の静寂。

それを破ったのもハイガだった。

「先生。」

突然の呼びかけに一瞬驚いたが、そんな様子は微塵も見せず言葉を返す。

「なにかな？」

夕凧君。」

「20,0秒切ったので、図書室行ってもいいですか？」

「あ、ああ……。」

その返事を聞くと、踵をかえし出入口の分厚い扉から姿を消した。

後にはなんとも言えない雰囲気と、自尊心を傷つけられたものの恨めしい視線が残っていた。

A c t 3 : 合同授業 (後書き)

なんか、いきなり同級生に敵視されましたハイガ君ですが
魔法力はすごいです (笑)

次は、ハイガVSカオンです。

.....どっちが勝つかは目に見えています (笑)

Act 4：虫ケラ（前書き）

ハイガ君、ちょっと腹黒いですW W

カオン君で遊んでもすね。

カオン君にも頑張ってもらいますがW W

A c t 4 : 虫ケラ

澄み渡った朝の新鮮な空気を、胸いっぱい吸い込んでハイガは目を覚ました。

いつもと全く変わらない静かな朝。

ハイガは綺麗に磨かれた洗面台で顔を洗い、いつものごとく寝癖のついた髪をとく。

ここは、生徒全員に与えられた、寮の一人部屋（もちろん貴族達の部屋はもつと豪華）。

部屋の中にはシーツを綺麗に片付けたシングルベッドと杉で作られた一人用のテーブル、それに合わせて作られた一人掛けの椅子、以上の必要最低限のものしか置かれていない。

殺風景な部屋だった。

ハイガは食事を摂るために、その飾り気のない部屋から出た。

寮にはとても広い食堂が一階にあり、大抵の生徒はそこで朝食・昼食・夕食を摂る。

料理は注文があつてから作るため少々時間がかかるが、出来立てを食べることができ、思いの外人気がある。

ハイガは食堂の調理係にクロワッサンとコーンスープ、トマトサラダという洋風の料理を注文した後、セルフの珈琲をついで食堂の端っこに座った。

そこに、取り巻きを引き連れたカオンが食堂に入ってきた。

入ると何かを思いついたかのように、セルフでグラスに水をつぎ、ハイガの居る方へ歩いて来る。

するとなぜかハイガの前に来て、足を止めた。

瞬間、その場の空気が凍りついた。

カオンがグラスを傾けていた。

ハイガの頭の上で。

ハイガの髪と着ていた制服は、かけられた水でビショビショに濡れていた。

それをハイガは、冷たい目で見ている。

「ああ、すまない。

手が滑ってしまった。」

とニヤニヤして全く反省していない顔でそんな言葉を吐く。

第一、手が滑ったというよりも、わざとかけたというのが本当で、言葉と事実が違っている。

が、誰もそんなことは口にしない。

朝比奈家の権力はとても強く、逆らえるはずがなかった。

「気にしてませんよ、別に。」

ハイガも朝比奈家の長男の機嫌を損なわないように、笑顔で対応しているように見えた、が。

次の一言で、さっきとは比べものにならないほど、空気が凍った。

「虫ケラごときの、ちよっかいなんて。

気にしていたら限きりがない。」

ニヤニヤしていたカオンの顔が自分を侮辱されたことで、真っ赤になっ

「俺をつ虫ケラだどっ!？」

ムキになって言い返せば

「別に、あなたを虫ケラ呼ばわりしたわけでは無いですが・・・。

ああ。そう思うということは、自分が虫ケラだと、心のどこかで考えていたんじゃないんですか？」

と返される始末。

その言葉にカオンは、さつきより顔を真っ赤にしながら、こいつには口で勝てないと思って食堂を後にする。

残ったハイガは、制服をどうしようかと心の中で考えながら、しかし注文した料理は食べないと失礼だお思い、黙々と朝食を食べた。

周りの痛い視線を気にせずに。

場所は変わってカオンの寮室。

ハイガの部屋とは違いとても豪華な部屋だ。

ベットは天蓋付きのキングサイズ、飴色の長テーブルに数人掛けの高級ソファァー、映像を見るための、とんでもなく大きい液晶ディスプレイに、たくさんのゲーム機。

正に、いいとこのお坊ちゃんという感じの部屋だ。

しかし今は電気がついていない。

そんな中に、部屋の主人がソファァーに座り、ブツブツと独り言を呟いていた。

「あのやろう、この俺を侮辱しやがって

くそつムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつく!!!」

カオンは、鬱憤を叫んで晴らすと、シンとした暗く冷えた部屋の中で、一言呟いた。

「あいつ

ツブす。」

A c t 4 : 虫ケラ (後書き)

やっと二人が接触しました。

次はカオンの過去に少し入ります。

カオンの幼少期の心境をちゃんと書けるように頑張ります!!

Act 5：訛音〈前半〉（前書き）

カオンくんの過去編です。

字を詰めすぎてちよっと読みにくいかもしれませんが、楽しんで読んでもらえると嬉しいです。

Act 5：訛音〈前半〉

今から16年ほど前。

訛音は、朝比奈家長男として生を受けた。

朝比奈家は、立浪町の中でも大富豪と呼ばれるほどの資産家であり、古くから続く旧家でもあった。

その為か、幼いころから沢山のものを学んできた。

バイオリンに帝王学、礼儀作法はもちろんのこと貴族の嗜みということ、魔法の基礎とその応用。家庭教師までよんで、小さい頃から全ての知識を頭の中に詰め込んできた。

立谷学院の幼稚舎の中でも、頭一つ分とび抜けていた。

たまに家で行われるパーティーでは、他所の町から来る父の友人や仕事仲間も自分の才能を褒めてくれた。

だから、自分がどの面においても人より秀でていると思っていた。

彼らはただ、自分のご機嫌とりをしていただけというのに。

それに気づいたのは、小等部に上がってすぐの授業。

魔法の適性検査の時だった。

検査と言っても、指定された魔法を発動し、その時間と魔法陣の構成を見るだけのもの。

順番は出席番号順で、それは姓の50音順で決まる。

その為、『朝比奈』のカオンが一番目だ。
カオンは今まで褒められてきたせいかな自信満々で、指定された魔法を発動した。

指定された魔法は豪炎（世間一般にはファイア）。

これは、料理をするときや暗い部屋に明かりを灯すときなど、魔法の中で一番日常的に、また、サバイバルな場面（洞窟とかダンジョン的なもの）でよく使われるものである。

この魔法は、誰でも使える初心者用のもので魔法陣の構成も割と簡単な上、魔法の基本である雷鼓と同じく発動のための詠唱が全く必要ない。

また、開発・改良の仕方が無数にあるため、魔学研の研究員達が作る魔法もこれの派生型が多い。

そんな初心者向けの魔法を発動するのは、小さい時から学んできたカオンにとって、朝飯前だった。

頭の中で魔法陣の構成を済ませ、体の中の生命力を魔力に精製し、利き手を前に突き出して、魔法を発動させた。

時間は、数秒だった。

カオンの手から飛び出した、赤く燃え上がるバスケットボールぐらいの球体が、人型のゴム人形に向かって真っ直ぐ飛んでいった。

それは目標に当たると、ジュツとゴムの燃えた臭い匂いと共に空気中に飛散した。

それを見た周りの検査官が、手に持っているバインダーに挟まれた用紙に書き込んでいく。

その後も検査が行われていったが、カオンを上回る様な生徒は居なかった。

ただ一人を除いて。

彼女は誰もが目を見開いた。

薄桃色の腰まで伸びた長い髪、紫紺の瞳。

その存在全てが神秘的だったが、それだけではない。

魔法の実力も驚愕に値するものだった。

彼女は、彼女の検査が始まった瞬間特大の炎を目標に飛ばした。

威力は絶大。

ゴム人形は、跡形もなく消え去った。

抉られた大地を残して

。

Act 5：訛音へ前半〈（後書き）

次は後半ですね。カオんくんの初めての敗北をちゃんと書けるよう頑張りたいです！！

今後もよろしくお願いします。

Act 6：訛音へ後半〈（前書き）

カオンくん過去編後半です。

ちよつと矛盾出るかもしれませんが、頑張りますのでよろしく願
いします。

Act 6：訛音〈後半〉

彼女は口元に微笑みを浮かべ、カオンの方を見た。

人を見下すような目で

人を蔑むような目で

何か汚いものでも見るかのような目で

どう？つとばかりに、カオンの目を真つ直ぐ捉えた。

紫紺の瞳は、挑戦的な光と、あなたには無理でしょう？という蔑みが入り混じっていた。

というか実際に言ってきた。

「朝比奈くん。

あなたには、こんなに早く魔法を発動できないわよねえ。」

その言葉に何も返せず、ただただ睨み返す。

「あなた、自分が天才だと思っていたようだけど、違うわ。

あなたは努力しても報われない、ただの凡人」

凡人と言われた屈辱に、顔がかあつと赤くなった。

その屈辱と、実際にその言葉通りの自分の能力に嫌気が差した。

その程度の能力で自分の力を天才と評価していた今までの自分が恥ずかしくて、この場から逃げ出したくなった。

だが、逃げることこそ一生の恥と思い、声を震わせないように気をつけながら、言い返す。

「なぜ、僕のことをそんなに敵視するんですか？」

その言葉に呆れたように嗤い、一言。

「なぜですって？」

それはあなたが貴族だからよ。

貴族つていうのは、見栄を張りたがる馬鹿ばかり。

実力もないくせに、自分の力を過信する。」

どうしようもない奴ら。と最後に付け足し、呆れたように首を振る。

「私は・・・わた・・・し・・・は、そんな口先だけの貴族なんて、大・大・大・大・大・大・大・大・大つ嫌い!!」

それを言ったとき彼女は、さっきまでの呆れた表情とは違い、顔を赤くしながら怒っていた。

彼女にも何か理由があったのかもしれないが

カオンは自分の家を

親を

家族を

自分の存在自体を、侮辱されたことに対しての怒りしか湧いてこず、そんな風に考えることができなかった。

その日から、カオンに対しての嫌がらせが始まった。

あからさまな物から陰湿な物まで

今まで仲良くしてきた奴らが、影でこそこそカオンの悪口を言い始めた。

朝比奈家という家柄に、今まで媚^こび諂^{へつ}ってきた鬱憤^こを今ここで晴らすうつとばかりに意気込み、服で隠れて見えない部分に暴力を振るった者もいた。

突然現れた謎の少女に周りは感謝する。

今まででかい面してきたあいつに、恥をかかせてくれてありがとう、と

もう、あいつのウザイ自慢話を聞かなくてすむ、と

そんな彼らを彼女は、生ゴミたかに集る蠅むしを見るような目を向けながら聞いていた。

その日から小等部卒業までの間、嫌がらせは一向に収まる気配がなく、中等部に上がるまで、カオンはいつも一人で行動した。

彼女に負けた日から、毎日鍛錬を怠らなかつた。

自分の力を過信せず、日々強くなってきた自覚があつた。

実際中等部では、他の貴族の連中には負けなかつた。

その点においては彼女に感謝していると言つてもいい。

だが、この前の授業で自分の実力を思い知らされた。

自分は、努力しても報われない凡人だと………。

あいつに水をぶっかけたのは、ただの八つ当たりだと自分でもわかっている。

でも、そうしなければ自分が以前のようになる、と思つと異常に怖かつた。

暴力が怖いわけじゃない。

陰口が怖いわけじゃない。

友達だと思つていた人たちに裏切られるのが怖かつた。

自尊心プライドを傷つけられるのが怖かつた。

中等部ではそれなりの友好関係を作ってきたつもりだし、周りに嫌われないよう努力してきた。

成績も自分より上の人は居らず、いつも最上位だつた。

高等部でもそうしていくつもりだつた。

そうしていけると思つていた。

でも、あいつのせいで全て台無しになった。

面白くもないのにヘラヘラ笑って、馬鹿みたいな話に相槌を打って、そうやって築いてきた友達関係を粉々に打ち砕かれた。

努力して培^{つちか}ってきた力を、魔法を最速で発動するという行動で、否定された気がした。

あいつが自分よりも速く魔法を発動したとき、昔の記憶が蘇った。あの時みたいだと思った。

またみんなに馬鹿にされる、そう思うとつい手を出してしまった。

部屋で叫ぶと少し冷静になれた。

つぶす、と言っても具体的にどうするかなど決まっていない。

とりあえず、フカフカのベッドに身を預ける。

今はまだ授業中のはずだ。

サボリになってしまつとも思ったが、どうでもいいかとベッドに体を深く沈めた。

コンコンッ

その時、自分の部屋の扉を叩く音が聞こえた。

給仕係が水を持ってきたのだろうと、入ってもいいという意味のベルを鳴らす。

しかし、予想と違って入ってきたのは自分の努力を否定したあいつだった。

A c t 6 : 訛音へ後半 (後書き)

今回は、ハイガ君目線だと思えます。
更新は不定期ですが、今後もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0999z/>

Children * Fortune

2011年12月12日00時48分発行